

栗郷土研究会報

21号

40. 2. 10.

兵庫県栗郷土研究会内
山崎町教育委員会

郷土史と人づくり

安田清風

わたくし昨年は、三月に北九州をまわり、五月に紀州の白崎へ、七月に美濃の郡上八幡、それから飛弾の高山、八月には伯耆大山の観証院で三泊、そのほか毎月一回は泊りがけで京都山科の一燈園へ参りますので、その序に京の古い寺や社などを見ることも多く、十一月には仕事を持って近江の琵琶湖に面した坂本の手前の穴太の井上大津市会議長夫人の経営しておられる琵琶湖老人ホームに三泊させて貰いました。

それらのところをまわりまわつて深く感じたことは、いま立派な文化を持っている町とか地方とかいうのは、殆どすべてが、いま出来たのではないということでした。まことに卑肉なことだと思ふのは、いま立派な文化をもつてい

目次

郷土史と人づくり	安田清風	1
億計王・弘計王物語の伝流	黒田義隆	3
柏野の池普請	小林楓村	6
四睡庵素練著		
俳諧三音鳥		7
本多館移転		12
後記		12

いる封建時代に出来たものです。封建時代にえらい殿様がいたとか、有徳の学者がいたとかいう町が、いまも立派な町だということですが。

尤も文化とは何かということも考えねばなりません。いまの多くの人たちは工場が建ち並んだり、舗装道路をトラックが右往左往しているのが文化だと思つてゐるかも知れません。しかし、ほんとうの文化というのは、そこに住んでいる人たちが美しい心をもち、正しい行いをして、みな

の泥で風間も雨戸をたてておかねばならぬようなのが文化だなどとは言えますまい。九州の中津というところで羅漢寺行の電車に乗りこみますと、大きな重そうな靴をかかえた女学生たちが、みなさつと立つて大人やこどもに席をゆずります。いまだき私の住んでいる大阪などでは、そんな女学生は一人もおりません。耶馬漢へも参りましたが、店屋のおかみさんでも、タクシーの運転手でもじつに親切です。青の洞門で運転手の知人の土地の郷土史家に出会いました。運転手はすぐその人に声をかけ、わざわざ少し後戻りをして車から私と妻とを下りさせて、その郷土史家いろいろの説明をさせてくれました。中津はご承知でしょうが慶応義塾をつくった福沢諭吉の郷里であり、あの谷一休は日田盆地で江戸時代に碩学広瀬淡窓のいた地方です。その徳化が現在も生きて残っているという実感をまざまざと感じました。

美濃の郡上八幡は、無形文化財となつた郡上踊で有名なところですが、元祿の頃に丹後の宮津から国替えになつた青山というお殿様は国境まで来て馬を駐め、一ヶ月にわたつて臣達に城での視察をさせて、その後入城して「自分の城下には士だの町人、百姓の区別はない。みな自分にとつては愛する人民たちである」というので、今で言えば無礼講といつたシレオリエーションをやつた。その名残りが現在の郡上踊りだということ。ここには郡上紬が出来、長良川の上流です

から、鮎の名所でもあり、その漁業組合長は円空に傾倒して川原で拾つて来た朽木で円空仏を彫刻している。私はそれを一つ貰つて来て今も玄関の書棚の上に置いています。こんな話は珍しくも何も無い、どこへ行つてもころがつています。いま日本のほんとうの文化は、東京や大阪には無いといつてもいいでしょう。京都や奈良でさえ、日本の文化は年々こわされてゆきます。そこにあるものはアメリカやヨーロッパの植民地で、一月三日に私は奈良にいつて久しぶりに若草山へ登つてみました。すつかり落膽いたしました。眼に入る少くとも半分は、もう日本のものではありません。そしてそのキラキラした船載の偽装文化の中で何が行われていると思ひますか。そうした偽装文化をつくりあげるために、いまの民主主義政治家は血眼になつて飛びまわつていように見えます。

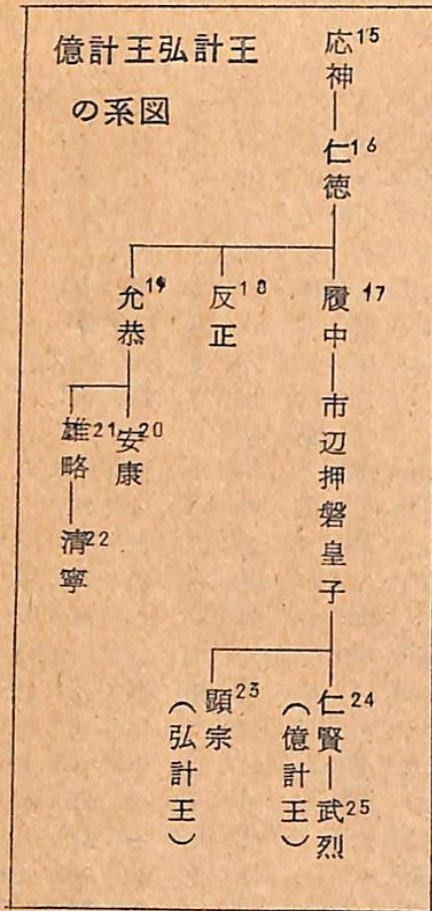
工場を建てるのがわるいなどは決して言いません。工場も建て、道も舗装し、立派な町づくりは政治家としての本領でしょう。しかし、もつと大切な根本的な政治は人づくりなのです。その「人」というものは、一朝一夕で出来るものではなく、永い歴史によつてつくられるのです。その歴史を尊重し、歴史をつくる政治こそ、本当の文化と言えるのではないのでしょうか。埋もれた歴史を掘り起こす仕事は、郷土をもつとも愛する人によつてなされることだと思ひます。山崎にもまだまだ埋もれ眠つている歴史がある

と思います。それを掘り起として現代の生活につないでゆかなければならない。それは、もつとも根本的な日本再建の道だと私は思っています。そういう意味で、私は山崎の郷土研究会の方々に敬意を表し、その携まざる努力を郷土の真の幸福のために続けられんことを熱望してやみません。

億計王弘計王物語の伝流

黒田 義隆

古代天皇の皇位継承の歴史には、血なまぐさい事件が何回もまつわりついている。億計王（仁賢天皇）、弘計王（顕宗天皇）兄弟の父市辺押磐皇子はそうした被害者の一人で、大泊瀬皇子（雄略天皇）に謀殺された被害者であった。雄略紀によれば、安康天皇が肩輪王のために暗殺され、雄略天皇が即位するのであるが、安康天皇は、曩に市辺押磐皇子に皇位を譲る積りであつた。大泊瀬皇子はこ



れを恨み、押磐皇子を近江の来田織の蚊屋野の狩場に誘い押磐皇子をあざむいて射殺してしまつた。帳内日下部使主は、その子吾田彦とともに押磐皇子の御子億計、弘計二王を奉じて丹波国余社郡に避難し、さらに、播磨国縮見山の石室に通れて自殺してしまつた。弘計王は、使主がどこへ行つたか知らなかつたが、兄億計王にすすめて播磨国赤石郡にゆき、名を丹波小子と変えて縮見屯倉首に仕え、牛馬を飼つて賤しい仕事に使われていた。清寧天皇の二年十一月播磨国司山部連の先祖伊与来目部小楯が赤石郡に新嘗の供物を調べに行つた。

たまたま縮見屯倉首の新室の宴に招かれた。この時二王子は龜の傍にいて灯びをつけていた。小楯の所望によつて、弟の弘計王が舞をまい、歌によつて市辺押磐尊の子であるという身分を明らかにした。小楯は驚いて人民をあつめて



飯宮を作つて二王子を居らしめ、清寧天皇に申上げると、天皇は大変喜び、自分には子供がないから迎えて日嗣の御子としようといつて、大臣大連らと議つて再び小楯を赤石に遣わして二王子を迎えさせた。天皇の崩後二皇子はたがい位を譲合つたがついに弟弘計王顕宗天皇がさきに皇位につき、次に兄億計王（仁賢天皇）が皇位を継いだ。

この和歌を伴つた物語とはほ同様な物語が古事記にも播磨風土記にも見えている。この記紀風土記の三種の伝承において共通してでてくる人物は、二皇子以外には山部連小楯である。しかるに、播磨の中世の地誌である峰相記にもこの二王子の伝説を収めている。同書には水鏡にしるしたこの二王子の伝説を引いた続きに次のようにしるしている。

当国兵粟郡ニ逃レ 隠レ給ヘリ。御所ハ当時ノコウ野市庭。郡司ハ誰哉。菅野高家辺ニ有リ。重代ノ者共皆皇子ヲ養ヒ奉テ御即位ノ後、其ノ忠ニ当所ヲ給ハリケリト申伝ヘタリ。若シ是等ガ先祖カ。



とあつて、二王子が兵粟郡に逃がれて隠れ、高の市庭にいた。郡司は菅野高家辺に居た。重代の者共が王子を養つたので即位ののち、その褒美としてこの所を賜わつたというのである。峰相記はさらに日本書記を引用して山部連の先祖伊予来目部小楯について「私に云はく、康保年中当国在庁兄部明石太夫大和明緒、同明賢、同明資等彼の供物を備進すと見えたり、彼の山部連の後胤か、その後彼の役云、余胤断絶云」とある。著者の私見であろう。ここに兄部とあるのは祝部の誤りであろう。恐らく明石郡海神社の祝部の家柄であつたのであろう。しかし、明石太夫大和明緒等とあるのは、八代足尼すねと同族の大倭直の子孫である都彌自足尼の系統で、称徳天皇神護景雲三（七六九）年六月に大和赤石連の姓を賜わつた明石郡の海直溝長あまのたけまたはその一族の子孫であつて、山部連の子孫ではないであろう。

丹後一宮海部氏系図には税部とあつてこれは祝部の誤であろうとされている例がある。

こうした、ひ弱い、か細い尊い身分の方が諸国をさすらい歩く貴種流離の物語の一例として麻績王あまのむねの物語がある。万葉集には麻績王は伊良いら島（今の神島、愛知県渥美郡）に流されて海部あまの民にまじつて生を保つたとある。ところが日本書記には因幡国に流されたとあり、さらに常陸風土記には遠く離れた常陸の海浜に近い板来いたぐの駅の西に榎木林の地があつて、ここが麻績王を居らせた地だと伝えている。

板来は潮来で、いらこともいたことも音韻が流動していたのであるが、ここにも海部との関係が思われる。一つの物語は、それぞれ関係者の間で伝承されていった。億計王、弘計王の物語も同様であった。二王子に従っていた日下部連または忍海部造細目、二王子を発見して朝廷に報告した山部連の家ごとに、それぞれ二王子の物語を伝承していたであろう。

宍粟郡は播磨風土記比治里の記事によれば、孝徳天皇の時、揖保郡を分割してこの郡が置かれた。比治の里（和名抄一比地郷）は、この天皇のとき山部比地が里長になった。安師里は旧名酒加であつたが、後に山部三馬が里長に任せられたので、山守の里と称へ、さらに安師の里と改めたとある。

山部連小楯は、日本書紀に「播磨国に遣はせる司、山部連の先祖伊与来目部小楯」とあり、播磨風土記にも「針間国の山門を領しに遣さえし山部連小楯」とあつて一時派遣された官吏が功によつて山部連に叙せられ、この国に永住するようになったのであろう。

これによつて山部連は宍粟郡と深い関係のあることが知られる。

億計、弘計二王子は、最後に赤石（明石）郡縮見里に来たのであるが、志深（縮見）里は風土記以来播磨国美囊郡に属している。風土記とおなじころできた日本書紀に赤石

郡としてしているのは、古くは美囊郡は赤石国にふくまれていたから、この赤石郡は明石国と解すべきである。丹後国与謝郡の明石にも二王子が避難してきたという伝説がある。仁賢紀には、或る本を引用して億計天皇の官として「一官は川村に、二官は縮見高野にあり、その殿柱今にいたるまで未だ朽ちず」とあり、播磨風土記にも王子の居た官として「高野宮、小野宮、川村宮、池野宮」の名を伝えていゝる。二王子の父は市辺押磐皇子といつたことは前に記した。

峰相記には宍粟郡にある二王子の遺跡として次の所をあげている。

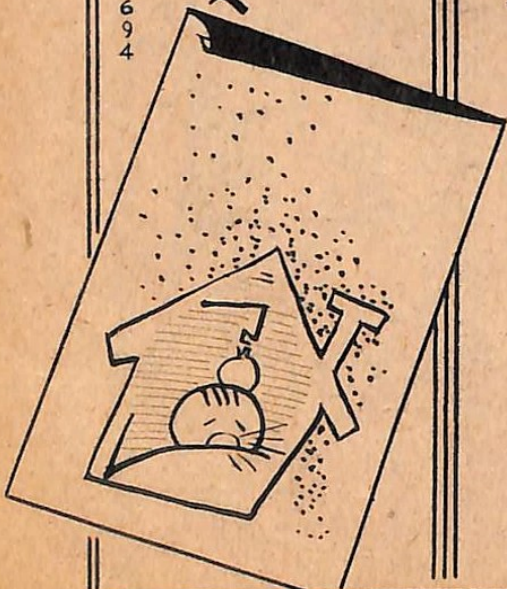
御所は高の市庭、郡司は菅野、高家の辺にいた。日下部使主がかくれたのは縮見の石窟である。酒加は栖所、安師は安志姫の住所で、あなしは穴栖であつて穴居のことである。日本書紀と峰相記の類似した名称を較べてみると次のようである。

くすりの

ご相談は

バニニ薬局へ

出水町角 TEL. 6694



(日本書紀)

(峰相記)

市・辺・押・磐・皇子
高・野・宮、縮見高野
高・ノ・市・庭

記紀風土記にでてゐる二王子の物語は、和歌が伝えられてゐる。歌はおのおの異つていて三種三様であるが歌を中心として語られ、歌われて古代の国中を廻つていたのである。そして音韻の通じる地名を持つ土地にその物語が根をおろし伝わつたのである。安栗郡へは山部の人たちが伝えたのであろう。峰相記に伝える二王子の物語も、もとは歌が中心をなしていたのが脱落して、ただ筋書だけが伝わつたのであろう。

(四十年一月五日稿)



柏野の池普請

小林 楓 村

「お松さんと柏野のどこは

なんぼついてもつきたらぬ」

此の民謡は赤穂郡上郡地方で、石搗の時にうたわれる。大枝新、柏野は上郡町の一部落で、昔は赤穂藩浅野侯の領分であつたが、元禄変後尼ヶ崎領となり、後享保元年安栗の安志領となつた。柏野の池が年経て堤のすき間から水が漏り、池には水が溜らぬことになつた。村人は心配した。これではお米が取れない。何とかして池水の漏らぬことにしたいと歎いた。領主のお助けを願う外ないと、恐れ恐れ懇願した。お慈悲深い領主は快諾して下さつた。村人は喜び我先きにと勇み工事に働いた。

領主は某代官を監督に遣わし工事を励ました。代官の宿を柏野の庄屋にして、田舎の食事を差上げた。

庄屋の家には大枝新から来たお松さんという美人の女中がいた。代官はお松を見て何より喜び可愛がつた。日々是れ好日で他の監督もしたがお松さん監督も忘れなかつた。

安志領からは池の普請はまだすまぬかと度々の催促があつたが、工事も大事、一方も大事で、まだすみませんと長

引いた工事をした。

これで誰いふとなしにこの民謡が流行した。代官もお松さんもよかつたが、柏野の土手もよくついたのでよかつた。大正年間に大雨で池水は一ばい溜り、土手をこして流れたが一寸も損害はなかつたと、今に村人はよろこんでいる。

四睡庵素練著

俳諧三音鳥

序



春の野山の雪消へて、松もみどりの潔き、畔のいとゆふの糸にひかれて、心も空にときめく折から、二三子の招に
応じて四睡の洞を忍び出、王孫が草の枕にあらねど、頭陀
に矢立の甲は忘れず、揖保の流れの桃源を尋て、ここに一
祝の淋しみを談笑し、かしこに二祝のおかしみに諷諫す。

されや、鶯のはつ音には、去年の物うきを忘れ、詩に作り歌に詠れて梅に宿かる風流を清氏も誉給ふ。雲雀は、ほのくらきより終日に啼くらせば、世渡る業のいとまなきを麦の仮寝のたのしきやはあらん。春の雁の頓て古す帰らんと臆々たる日影に一声ふたこゑ落したるは、蠶の苦屋も心うく、妻よぶ賤が耳にも悲しまして、風雅は爰の淋しみにとまりぬ。比三鳥の三声におのづから其姿わかれば、みつね鳥と名く。扱末に、桜の一章は、ひとへに比遊の帰思を忘れさらんと社中も同じ志を合せ、千枝の葉を手向て比交
久しかれとなん。

寛政壬子弥生

四睡庵 素練

鶯

うくひすや春の糸にほときそめ
笠縫ふ窓をつたふ陽炎

玄鳥庵 民止
四睡庵

いよいよ
一年生
ピカピカの
ランドセル

入学期前
大奉仕提供
新学期用品は

伊藤文具



中央通商店街
でんわ 一ニ六

百貨用品所台



山崎警察前 電348

山ほと肉に煙艸の霞して

何そといへは理窟好なり

亥中から出るは月にも宵寝やら

露の深さも竹緑のはし

御奉行のあまい新酒になれ安

後住も征にかか^{しど}る基かたき

雨垂のぼたりぼたりとはてしなき

行つまりたる辻子の黄昏

藪入の花の帽子の雪とけて

面白さうに喋も鳴く

鐘の音の長閑に曳て寛永寺

まつ貸りあてた見はらしの庵

顔つきは赤旗らしい横平さ

夏瘦風色のふんどし

涼しさはたとへ濡ても夏の雨

熱田へ畔を行けば近道

古人里

忠 閣

流 水

文 川

庵

止

閣

里

川

水

止

庵

里

水

閣

川

喰歩行馬もいろいろ月の秋

朝寒いのに祖父の潜上

けり所もない間引菜をひきちらし

自分渡しのつな手操り舟

開帳も大方花の働きて

暮おしまるつ空の和らき

一之宮藤

戸帳にもふじのかざりや宮柱

高旗山桜

高旗の雲間になひくさくら哉

岩倉山躰躰

岩倉に篝火を焼くつつし哉

鼻崎山残雪

鼻崎のまた冷さや残る雪

三木川鮎

水色に和光のちりやのほり鮎

梅のきつとめきたるは、麻上下に扇持たる風情、海棠

の風流姿は何とやら優に見へ侍る。山吹の清けに藤の

おぼつかなきさま、草木こころなしといへれど、其姿

より心ありげに見申れば、拾かたき事多し。なほしも

世務のいとまに、花馬を友として、世上の態を遠さく

るはいとたのもし。菓一把の座敷には、客対すべきな

く、水呑の音のかしましきも嫌らはぬ人の心をおかし

文 川

古人里

志 閣

流 水

民 止

庵

止

川

里

水

閣

里

水

閣

川

けれ。

初喋や遊びし菊の若葉より

雲 雀

いつばいに空のゆるみや舞ひぼり

麦の青みをそへる朝寄

日永から庄司は小供曳つれて

こけて笑つ起て笑つ

唐黍の角ふり立る風の神

雲は鈴廉へ逃て照る月

口まめな燕いなして淋しかる

若イ者よりこちの針先

そういうて餅の酒のと好もせず

岑閑とした台所なり

何事もあなたまかせにするか花

ひとり娘を雛のあつかひ

袖九巾のひらりと飛て御曹司

河岸を覗の夕くれの松

しぐれ月霜の降月雪見月

さすり火鉢にたたき納豆

如来と呼るる祖父の此世から

白挽さしてあれは如意輪

雨脚の静に月のうす明り

素 練

石柳観

亀 有

四睡庵

鳥 声

岸 々

雪 簷

有

庵

声

岸

簷

有

庵

声

岸

簷

有

庵

声

岸

さうかうすれば綿入の比

去年の秋今年の秋も又旅寝

いらぬ所に金の沢山

芳郎より別れて花のここかしこ

霞も七重八重にあたゝか

与位棧道

かけはしや霞をそゆる裾もやう

長水茂陰

長閑さや山も眠りの雲深し

野原瀑布

布を引滝や野原の春気色

母梅猿声

母を呼猿の木つたふ余寒哉

和 合 ノ 聯

四 睡 庵

雪 簷

鳥 声

岸 々

亀 有

岸

声

庵

有

簷

ち ぜんそく あがた薬局

御相談下さい

山崎警察前 電一五番

俳諧の聃は、嵯峨の落柿舎に関口の聃ありてそれが諸国

にはしまれるとぞ。此石柳観に物好の駢あり。画は陳柳齋の筆にして、予に讀あらんことを求む。つらつら思に、乾坤ひらけて大和つ国を生し、家に夫婦の二柱あり。是和合のはじめなれば、和合の駢と名付く。三河義歳の諷物に、一本の柱は一の宮、二本より五七と栄ふ。一は和にして、二は礼ならぬかは、爰を太子は和を以て第一と定給へり。さて画の石白は形容愚鈍にしておかしみなから、おのずから陰陽雌雄の働を持って動静の間より、日本一の丸かれたる物を産出し鬼神の心をも慰め、おとこ女の中もむつましく、睦月の廿日より餅つき夕にいたるまで、朝四暮三のいとなみは正木のかつら永き夜の火焼にも、足曳の山郭公鳴ひははつたいに日を忘るゝも、此ものの働とて雄神はあなむましと誉給へば、雌神はあなうれしとの給ひしを折々欠の持病起りて、庭にころりの転寝を起して仕立物の重石につかひ鮎の逆おしに雇れけんよし、人の譏りの石白芸も彼が無病息才のゆえなれば、二季の洗濯障もねがはずお竹お鶴が手に愛せられてうたひ尽し、松も亀も笑ひこぼして生涯無事に孫子のすへまでもかたひ契りは尽ざらましお

降れ降れ粉雪

天よりちらし

地ては丸める

ふれふれこゆき

春の雁

滝夜のこゑや幽に春の雁

寒もゆるむ関のみか月

兼題の桃に伯父君ほつとして

草履めすのも御保養の内

川の瀬の音は日和にきはまつた

牛も手伝ふ寺の麦かり

和へ物に竹の子藪を荒さるる

大波羅衆の鼻の大き

腰元をしかればしかるほど笑ひ

火のしの尻を撫て見たがる

曇痒たから氣違ふ翌の華

桜鯛引く浜の正月

白鷺の翔行春も暮かゝり

出温泉の儲になつた大食

垂こめてこちも盧生の枕なら

思ひにつもる雪のしつぽり

既^{既に}も縁で年の立役者

遠ふ聞ゆるならば休鐘

完に完にと月も機嫌か能さうな

女子の中に祖母の未枯

干柿の皮むさちらす龍田川

仙風舎之

好

四睡庵

王倉

柳系

歌柳

露公

庵

之

系

倉

公

柳

之

庵

系

倉

公

柳

倉

公

庵

藁屋の雨の音もせて降
何事も世は名りて国の華

君を子の日の松の弄

三方炭

寄安き炭を三方の春寒し

福野竹林

春風や直なる竹の遊ひてれ

小原山葵

山の名のからみもふれる山葵哉

深谷蔵

深谷へ手の届きたる蔵かな

三方紙

楯板に長閑を干すやみかた紙

仙風舎ノ記

四睡庵

竹の瓦を蕎麦を愛して号とす。好之のこのめるあり
後口に竹の茂りを望て竹林亭と呼び、前に松樹あり、
高さ棟を越へず、枝は左右に流れて軒に近く、朝暮の
清音諷々たれば、仙風舎と名付く。此樹は百木の長に
して、花に凋の痛なく、霜に枯るゝの恐を忘るゝより
詩歌の家にもてはやされて千歳の寿を祝す。夏は此陰
に風あつまりて苦熱を遁れ、端居の眠りに千金のたの
しみを尽す。涼風いづこより来る。峯々の松が枝より

之 柳 糸

王 倉

柳 糸

青 柳

露 公

好 之

四 睡 庵

はこびて風に富たるといふべきや。秋は此声を感じて更行
夜半に風客の腸を断、此波は紋所に用ひ、此節は摺小木に
能あり。さて此地は、四方皆山也。東に高見山高く三方の
郷の鎮守を安置す。裾には揖保の水すじ北より南に流て山
家無縁の折を補ふ。西は山につゝきて雑歌猿声のたより近
く寛の音とくとくには藤覚の雨音を観し梅木犀の香には、
起起の鼻をよるこぼしむ。好竹連山の筆の鮎は、松江の鱸
を欺かん。かくてみどりの若やきより青葉散時は箒の奴に
遣れ、秋しらぬ顔つきの増さも替らぬ心そたのしけれ。此
樹のわたりを廻りては、殆新そばの腹をすかし、雪の面白
ふ枝をためたる日は杖曳て異運の木履も此日の用にや、是
みな意根の境となりて、意の風雑をすゝむれば、爰に四時
不変の楽みをとゝめ、東は此里に拝觴を飛し、忍酔中の風
に乗じて、高砂、住吉の汀に舞遊び生の松原の生ながらへ
て尽せぬ術の宜哉自在なることを

(後半は次号に掲載します)

春

召物に
お手入を
大切
季節

トライクリニング
光岡クリニング店



山崎町役場スグ上
電話 六三二番

本多記念館移転

山崎中学校正門の西側にあつた本多記念館は、近くの西鹿沢閨斎神社境内へ移転改築され十二月に工事完了した。同館はやや粗末ではあるが本多藩主別邸で、残り少ない田幕町代建物の一つで、西鹿沢公民館兼閨斎会館として少集会場に利用されることは誠に感謝深いものがある。中学校は、この跡に近代的な講堂を建設中で、本館移転保存の実は、町当局の理解と西鹿沢地元の熱意努力に負うものである。本年一月三日同所で県議、町長はじめ各種団体代表列席の上盛大に落成式が挙行された。

後記

- ☆ 本号から一頁に目次をつけてみました。一寸前の記事を探すとき何かと役立つのではないかと存じます。
- ☆ 本号の寄稿家は期せずして郡外の方三人になりました。いずれも本郡に馴染深い方ばかりで、本会報の読者であります。
- ☆ 安田青風氏は、当山崎町を去られて二十七年。八年になります。山崎高女教諭、歌人として御存知の方も多と思います。昨年の文化祭で大阪芸術賞を授賞、昨秋龍野市に歌碑建設あり、歌誌「白珠」の主宰者。昨年歌集「遍歴者」を刊行。目下豊中市に

在住

☆ 黒田義隆氏は、もとの宮伊和神社の神官勤務されたことあり、現在は明石市役所の重要ポストで、文化や歴史については大変御造詣が深い方です。

☆ 小林楓村氏は、すでに本会報に二・三寄稿頂いたかと存じますが、相生市矢野の方、郷土誌「播磨」を熱心に刊行されていて地方郷土家の白眉。

☆ 四睡庵素練の「三音鳥」を本号と次号に分けて掲載します。この本は寛政四年（一七九二年）の出版で、本郡文化財として貴重なものですが、中々版本は見つかりません。青蓮寺の坊さんで、当時地方俳壇の第一人者である。

久保タンス特撰



御婚礼道具
新学期用家具
特別奉仕

ズラリ陳列 ぜひ御一覽下さい!!

久保タンス店

山崎町本町通
でんわ 7番

